特集にあたって

筑波技術短期大学　小池　将貴

21世紀が，目前に迫ってきた．これを1つの節目として，ORについて考えてみることにした．

まず，ORを含むソフト系科学技術が，21世紀のキーワードと考えられるので，冒頭で，人事院の市川惇信氏に展望していただいた．

ついで，3世代からの御意見によって，21世紀に向けてのOR観を浮き彫りにしたいと考え，まず，座談会形式で，ORの中堅の方々に21世紀に向けて奔放にしゃべっていただくことにした．森村英典先生の軽妙な司会に誘われて，参加者がつぎつぎと本音を語り，読みごたえのあるものに仕上がった．

ORの先達からのメッセージとして，岡久雄氏は，会社（副社長）から社会（官関連団体理事長）へと21世紀を先取りするような御転身をとげられ，両世界に跨る貴重な御発言をいただいた．また，コンサルタント業50年の伯野慶三氏の一言は思わず耳を傾けさせられた．日本の代表的コンピュータメーカの副社長を務められた水野幸男氏は，長年温めてこられた情報論を御披露してくださった．そして，史記にさかのぼって語られる三根久先生のOR論は，現代世界全般を視野に入れるにいたり，壮大である．

締めくくりとして，多くのOR若手からの一言を集めたところ，さすがに多彩である．新鮮な理論解題，ざん新な提言，意外な現場状況など，思わず引きずり込まれた．

全体を通して，2点，気づいたことがある．

第1点は，3世代が共通して，ORに対し辛口の御発言をなさっておられることである．確かに，世紀末の日本は，産業の空洞化・景気の長期低迷・リストラなど，暗い話題が多い．このような状況下で痛いのは，実業界のOR離れ，他学会に対するORのアイデンティティ不足などの御指摘が的を突いていることである．

この閉塞状況を前にして，思い出したのは，米国のある学会誌のコラム記事である．胎児が母親のおなかの中で過ごす短い文なので，紹介させていただく．暗く温かい羊水にのんびりと浸って胎児は初めは幸せであったが，それも5～6カ月が過ぎるまでだった．

7カ月にもなると資源がどんどん目減りしていくことに気がつくのである．10カ月に入ったとき，資源はとうとう底をついてしまい，胎児は心配のあまり気が狂いそうになる．その瞬間，強い力で押し出され，悲鳴を上げながら暗いトンネルをくぐり抜けると，突如，広大でまばゆい世界を見るという話であった．

OR屋が，今は暗いトンネルにいて，21世紀になると，皆が皆，広大でまばゆい世界を見ることができると言うつもりはない．しかし，ORの凄みを適用体験から知っている者は，広大でまばゆい世界が間近に迫っていることを信じて，志を失わずに地道な努力を続けておられると思う．その際，この3世代の方々からの辛口の助言は，身にしみて役に立つはずである．

第2点は，ソ連の崩壊，バブルの破裂，日本産業の空洞化など想像を絶する事態の連続にへきえきしてか，未来予測を禁欲的なまでに拒んでいらっしゃることである．そこを，あえて21世紀を展望するために，西欧の覇権について振り返ってみたい．

12世紀，未開の蛮族であった西欧は，サラセン・オリエント文明を通じて，ギリシャ・ローマ文明を知り驚がくした．ユークリッドの原典をアラビア語からラテン語への翻訳で初めて知ったのもこの時期である．

16～17世紀，コペルニクス・ガリレオ・ニュートン・デカルトによる科学革命は，旧来文明を吸収し尽くしたのちに起きた．ギリシャの分析知の伝統に，実験という独創をつけ加えて，仮説→実験の無限スパイラルで真理に迫る科学的方法を発明したのである．

こうして西欧の科学・技術文明は世界を制覇して今日にいたった．

しかし，有限の地球環境が苦悶している世紀末，西欧に陰りが見える．21世紀には，歴史は，再びオリエントに向かうかもしれない．とすれば，西欧文明を吸収しつくした日本は，オリエントを代表して，従来の文明に何らかの独創をつけ加えることができる最適のポジションにいる．21世紀に，日本は，広大でまばゆい世界を見ることができるかもしれないと考えると面白くなる．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．